

奥利根 奈良沢川四番手沢（小沢本流）～三番手沢

佐貫

【日時】 2007年10月6日(土)～8日(月)

【メンバー】 佐貫(L)、木下、手嶋

ブサの裏沢に始まり小穂口沢、三ッ石沢と利根源流右岸の沢を探訪すると、次は越後沢と四番手沢（小沢本流）が気になってくる。夢だった越後沢（右俣）をお盆に遡行したからには、その勢いで今シーズン中に四番手沢というのは自然の流れであった。実は数年前に一度は計画したものの悪天中止となり、今回は満を持して(?)のチャレンジとなる久恋の溪でもある。

10/6 朝方曇り、後晴れ

奈良沢川出合までは、いつもの高柳さんのボートで送ってもらう。水位がすっかり下がった矢木沢ダムはお盆とは別人（別ダム）のようだ。湖底が露出するバックウォーターを後にして静かなブナ森に囲まれた奈良沢川を歩き始めると、奥利根の沢に来た嬉しさにどきどきする。小沢に入り、一番手沢、二番手沢と数えながら平瀬を進む。この流域は熊狩りの場であったことからこのような名前が付いている（一番手、二番手等は撃つ人を指す）らしいが、さぞかし熊ものびのびと遊べるであろう森がこの辺りには広がっている。

三番手沢の出合に翌日晩のための予備酒をデポし、本流を引き続き歩いて行くと、先頭



7mの「門の滝」、左を登る

にいた手嶋さんが叫んだ。「すごいでかい岩魚がいるよ！」数々の尺物をあげてきた手嶋さんが驚くだけあり、確かにそれは40cmくらいありそうな鯉か鯖と見まがうサイズの大岩魚であった。人影にも動じず悠然と泳ぐその姿には、主の風格が漂う。すぐ先は魚留滝である。

朝方は少し灰色がかっていた空が次第にすっきりと晴れてきた頃、沢が右にカーブして大きな滝をかけたのが見えた。クランク状に屈曲する流れが40mほどの多段の滝と

なっている。ここは思案の末、左の草付スラブ下部から上がり、上部は落ち口を目指してブッシュを使いつつ登った。一旦巨岩帯となったかと思うとすぐにまた屈曲部があって再びゴルジュに。左手草付からトラバース気味に登る。地形図上の四番手沢（実際は単なる枝沢）を過ぎるとまたまた7mほどの門のような形の滝をかける屈曲部。今度も左壁を這い上がる。先に行った木下さんと手嶋さんが雄叫びを上げているので何かと思っただら、下からは分からなかったが左壁を登りきると先端は屏風のように切れ落ちていた。覗き込んでいると10m下の2m幅のゴルジュに吸い込まれてしまいそうな場所だったのだ。まさに自然の造形の妙。ここは右岸の藪をからめて登り少し先から巻き下りた。続いて現れた12m滝は、巻けそうだと思いつつ左の凹角に取り付く。途中からツルツルで、木下さんがザイルを出して突破したが結構悪いと感じた。さすがである。落ち口にはかなり古いと思われるハーケン2つと、色が落ちて白くなったシュリングが残置されていた。

この先の5m滝を左岸から巻き、懸垂で下りて少々進むと沢が少し開けてくる。標高1330m辺りで左岸から沢が入って来たところに整地済みのような絶好の幕場を発見し、そこで行動終了。天の川が見事な夜空、放射冷却で空気が冷たい。焚き火の勢いも弱く、寒い夜だった。

10/7 晴れ

朝はあまりの寒さと焚き火の弱さに、一旦外に出るも結局ツェルトに戻って朝食。出発までに少し余計な時間がかかった。下流部よりもさらに白さを増したようなV字谷が朝日と緑に映えて本当に綺麗だ。どれも写真に撮りたくなるような美しい小滝が続く。寒いので濡れたり泳いだりは勘弁と、へつりを多用して進む。手嶋さんも草を頼りに華麗なトラバースを見せる。小沢岳から下りて来る支流は、2段8mの美瀑で出合う。水量は大したことないのに釜がどれも深いのは増水の早さと激しさによるものか。少し日も高くなってきたところで4mほどの小滝が前をふさぎ、巻きは大変そうだったのでたまたまネオプレーン（下）を履いていた佐貫が釜に入り右壁に取り付くも、水から上がってから目の高さまでがツルツルで届くところにホールドもなく行き詰まる。手嶋さんに水中ショルダーをしてもらい、無理矢理ハーケンを打ってシュリングアブミで何とか一段上にずり上がるが、手嶋さんには長い間寒い思いをさせてしまった。その上、落ち口までもちよっと思切りが要る感じで、こんなことなら木下さんに行ってもらうんだ



草紅葉の源頭を下る



三番手沢の源頭を下る

ったと思ったが後の祭り。(時間がかかってしまい失礼しました。)

さすがにこの先は源頭の雰囲気となり、始まりかけた紅葉に見惚れながら藪漕ぎゼロで笹藪の国境稜線に飛び出した。下津川山や小沢岳、三ツ石尾根や小沢のスラブが遮るものなく広がり、下津川南沢が手招きしているのを感じる。一番好きな山域が一望できる最高の展望台、至福の時だ。いつまでも眺めていたいが三番手沢の下降があるので、後ろ髪を引かれつつ西に向かってゆるい藪稜線を下り始める。木下さんが先陣を切り膝くらいの笹藪と草付きを縫いながら250mほど標高を下げ、小さい沢型に入って下り続けて行く。左からも右からも支流がどんどん合わさってくるが、

どれも結構滝を持っており、私たちのとったルートが一番効率的だったようだ。1500mを過ぎるとさすがに大きな滝が出てきて、仕方なく右岸の藪から巻くことにした。尾根をトラバース気味に下りていくと反対側からも大滝をかけた沢が入っていて、最後はそのスラブ滝の横を懸垂で降りることに。捨て縄をかけようとすると、その木には数年経過したと思しきシュリングがかかっているびっくり。「蛇の道は蛇だね」木下さんと笑う。こんなところに来たのは誰だろう、そう思った途端に私の脳内ジュークボックスでは月光仮面の主題歌(♪どーこのだーれだか知ーらないけれど)が始まってしまい、木下さんが「♪だーれもがみーんな使ってる」と続ける。その捨て縄を使い、

続きを歌いながら懸垂。

その後もいくつかの滝を巻き下りると今度は底の见えないような落ち込みが現れた。少し戻って右岸から入るルンゼを越えての大高巻きをこなして一度沢に戻るが、30歩も歩かないうちにゴルジュの中のツルツル小滝がまたもや出てきて再び巻き。この頃には手嶋さんの頭の中でも児童合唱団が歌う月光仮面の主題歌がリピート中。4段50mほどの見事なスラブ滝(斜瀑)までまとめて巻いて沢に戻ると、大きい足跡と小さい足跡、熊の親子だ。通ったばかりのようにも思え、ここから



3段 50m スラブ滝下部を懸垂で下りる

しばらくは笛を吹きながら下降する。この後も滝は続き、トータルで8回の高巻き(最後の1回



を除き全て右岸)、2回の懸垂でやっと三番手沢の出合に戻ることが出来た(デポ酒があったから戻る気になったのかもしれない)。

行きには泊まれる気がしなかった出合は、よく見れば幕営可能だ。大增水には耐えられそうにないが大丈夫だろうということでここを庵と定める。焚き火もよく燃え、木下さんが乾かしていた服には大穴が2つ開いてしまった。軽量化を凶っていたはずなのに手嶋さん得意の Pasta など色々つまみも出てきて、奥利根の闊達さ美しさを絶賛しながら気持ちよく飲み続け楽しい夜を過ごした。

10/8 雨

2時頃から降り出した雨に多少恨めしい思いをしながらも、却ってしっとりした風情もある奈良沢川の森に囲まれ歩く。あとはバックウォーターに戻るだけだ。慣れない舞茸探しを試みるが収穫はなかった。心なしか本流は増水していて、行きよりも渡渉が大変である。バックウォーターに着いてみれば、そこは何か別の惑星のような奇妙な風景…いつもは湖底に沈んでいるはずの、古い切り株が点在するひび割れた地面にぼんやりと霧がかかって不思議な雰囲気だ。遠くで手を振るのはバルタン星人…ではなく、二日前に別れた高柳さん。ひとしきり話をした後、ダムサイトまで送り届けてもらった。雨の渡船は寒かった。

天候に恵まれたこともあり、期待以上に美しく楽しい小沢本流を堪能できた。絶悪なところもなくかといって冗長でもない、まさに私の好みのタイプの溪相。残念だったのは早くからこの沢を共に狙っていた大野さんが仕事の都合で同行できなくなってしまったことだ。しかし今回辿った流域や見渡した範囲には、我々「トマの風へソ曲がり教」の課題がいくつも残っている。教祖・宮司にザイルを垂らしてもらって、巫女というにはちょっとトウの立っている私ももう少しこの「神の住処」奥利根の聖地巡りを続けられたら、こんなに幸せなことはない。

【グレード】 通しで4級下

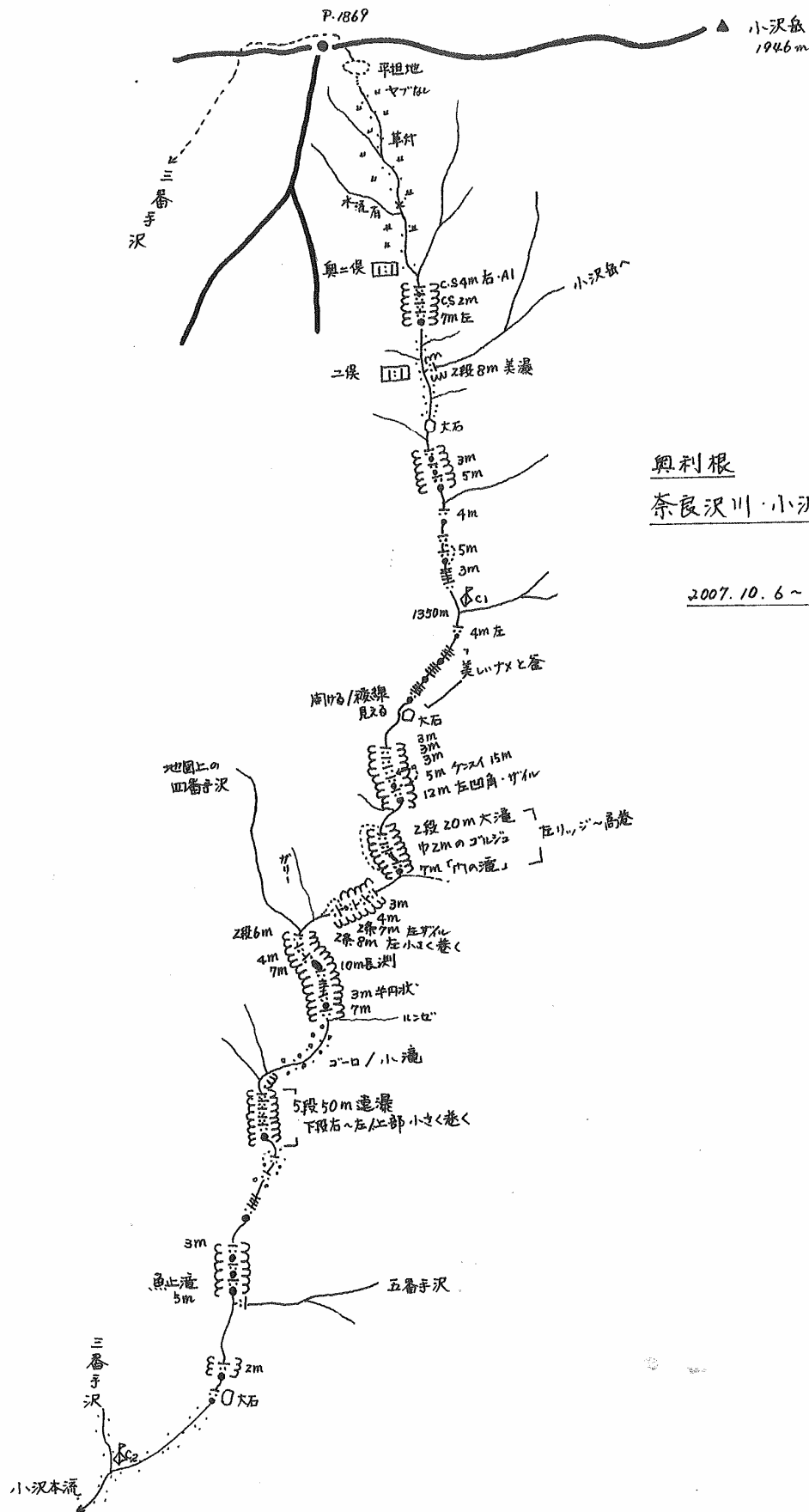
【行程】

10/6 バックウォーター(8:50)～小沢出合(9:10)～三番手沢出合(9:55)～四番手沢出合(12:20)～c1330m幕場(15:20)

10/7 幕場(6:25)～稜線直下の平坦地(9:05/20)～国境稜線(9:30)～c1500m付近(10:30)～三番手沢出合幕場(15:50)

10/8 幕場(7:30)～(奈良沢川沿いでキノコ探し)～バックウォーター(9:20)

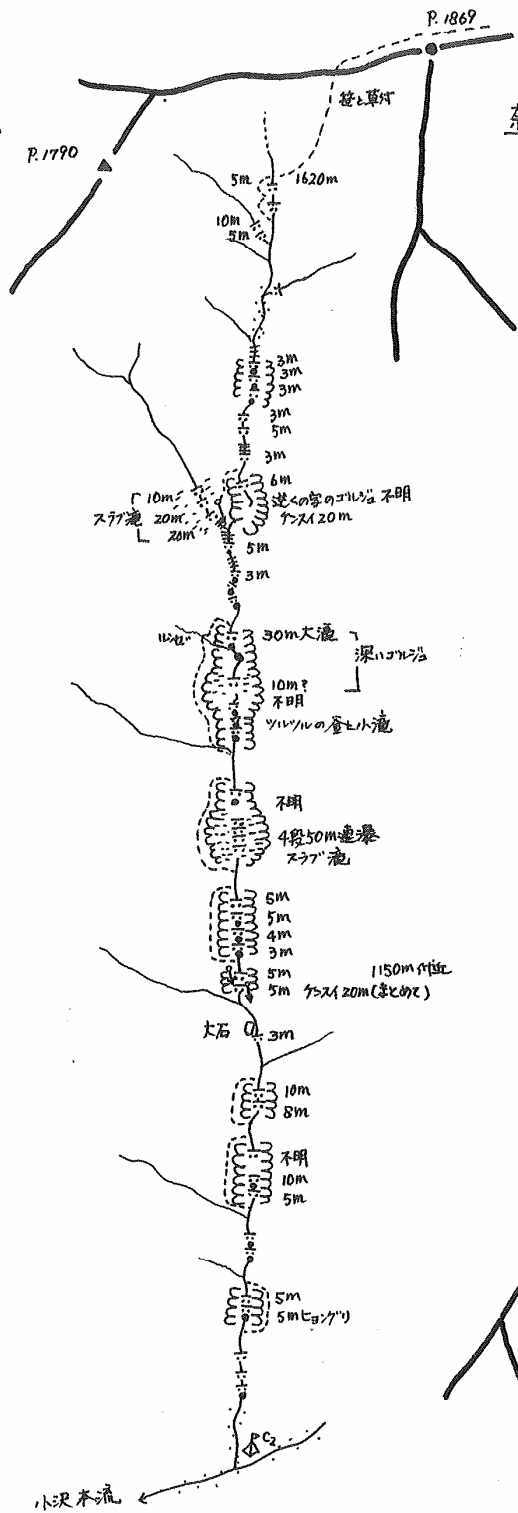
【地図】 奥利根湖



興利根

奈良沢川・小沢・四番手沢

2007.10.6~8 作図:木下



奈良沢川・小沢・三番手沢 下降

2007.10.7. 作図:木下

奥利根・奈良沢川小沢周辺・概念図

